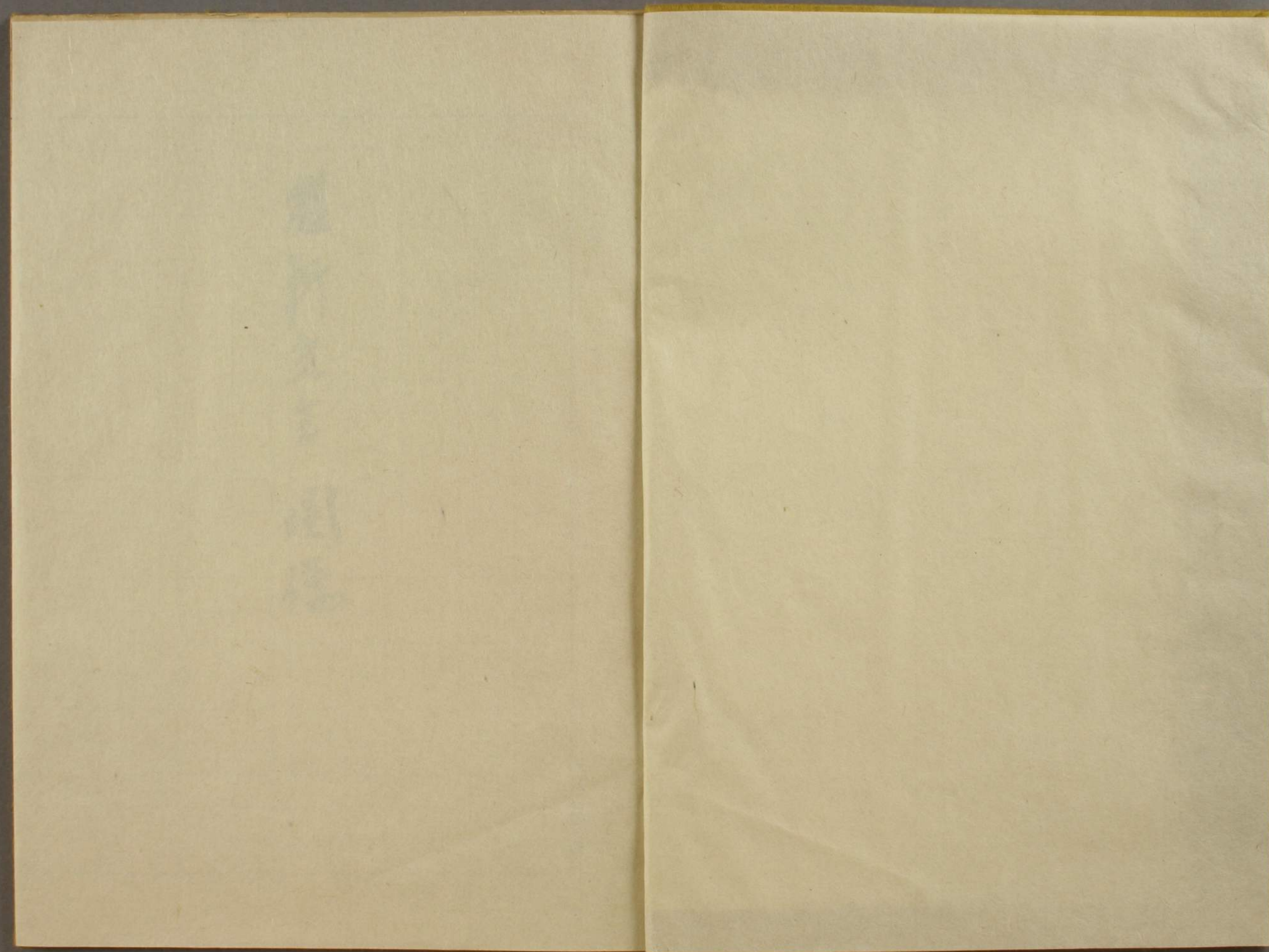


大槻文彦関係新聞切抜

洋学文庫
文庫8
A 314







德軒先生 圖像

對譯辭書の起原(上)

古版の書籍が漸々薄れ行くと同時に世に珍重せらるゝに至るは自然の成行であるが此等漢籍和書に關しては先輩已に記述する處あり只我が泰西文明の泉源とも謂ふべき和洋對譯辭書に關し其の起原を釋ぬるは今日に於て深き興味を感ずるのである今より百數十年の昔に在つて所謂蘭學者なるものが如何なる苦心の間に講究問尋したるかは杉田玄伯先生の記したる『蘭學事始』に詳記してある後學の士之れを一讀せば必ず思ひ半に過ぐるであらう

新聞

拾六百八千四第 (可認特便郵三第)

で、予が祖父の門に入り苦學する處あつたが遂に辭書編纂の志を起し當時祖父が所有せるフランソイス、ハルマの佛蘭對譯辭書中から蘭語のみも抄出し之れに和譯を附したのである洋字を木版活字とし譯語を書き入れたもので印刷部数は僅に三十部である其の茲に至るまでの勤勞は中々なもので祖父が其の頃の蘭學家の姓名を番付にして杉田氏に與へ氏は其の名簿によりて諸家を歴訪し各家の考へし譯語を聞き取りて語毎に記入したこの話である當時ハルマと云ふ語は人名の意義を失ふて専ら辭書と云ふ意味に用ひたるを以て見るも此辭書が如何に蘭學者の寶典たりしかを察するとか出來る

號五

此の書の出づるに及んで「ハルマ和辭」をば「江戸ハルマ」と呼ぶに至り後に佐久間象山が之れを出版せんとて幕府に請ひけるに許可されざるのみならず却て私書私販の罪を詰責せられたりとのことである

對譯辭書の起原(下)

以上の二書は蘭和對譯辭書であつて當時蘭書を講究するものゝ爲めには大なる利益を與へたのみならず多くの學者をして蘭書を講じ泰西文明の知識を得せしめ我が國の開明を導くの燈光となりしは掩ふ可からざる事實である次に我が學者が講究せんとしたるのは英學である此の方面には如何なる辭書が編纂せられたるかと云ふに先づ世に顯はれたのは

英和對譯辭書 である是れは堀辰之助、高島太郎、其作貞一郎、手塚節庵の諸氏がピカドの英蘭對譯辭書を基礎とし蘭語を削りて英語のみを存し之れに譯語を附したのである出版したのは文久二年十二月

農學會報原稿用紙

Table with 20 columns and 15 rows, used for agricultural society reports.

Table with 20 columns and 15 rows, intended for agricultural society reports.

大正三年七月二十八日
夕刊 報知新聞
一三四三ノ一

人類館 (全) 初堂

高橋是清

▲久しく休養したお池の印。今日は人類館
▲久しく休養したお池の印。今日は人類館
▲久しく休養したお池の印。今日は人類館

ゴロに晒されて、オトクランドへ奴
練に賣りこかされて仕舞つた、流石
の高橋是清君も散々の体、ザラの立
志傳とは此邊からして先づ軌道が違
つて居る、其後富田鐵之助に救ひ出
されて日本へ歸つたが、一寸英語が
イケるので調法がられ、薩摩に接近
して黒木大將の合謀を察し、時の農
相西郷從道に取り入つて特許局長と
まで成り上つたのは、エライ、此の如
きは、禍轉じて寒翁の脈を福神漬に
した程の騒ぎだ。

▲例の救世主富田鐵之助君之を聞い
て、其氣ツブが面白い」と再び買つ
て出、川田小一郎に紹介して日銀の
建築係、是清君七轉び入起で又漸く
才飯にあり付く事になつた、當時是
清君の半面を説明す可き好箇の一挿
話がある、時の農相後藤兼二、秘
書官の早川頑鐵を伴つて一日精養軒
に晝飯と出かけ、偶々高橋是清君に
落合つた、伯後藤高橋の古怪なる風
手を奇なりとして「アレは誰ぢや」と
早川に聞く、早川は高橋の蓋笠の
弟子、詳に高橋の経歴を物語ると、
後藤伯益々奇なりとして、早川を仲
人に「もう一度特許局長になる氣は
無いか」と煽騰を持ち込んだ、是清
君たるもの仰しやる迄も無く、顔る
食指を動かしたが、そこは男の子私
の身体は川田鐵之助に任してある、一
存に御返事は出来ない」と一寸芝
居、それが又馬鹿に當つて、川田の
爺さん大に脂下り「ヨシ俺は任した
身体なら俺が引受てやる」と矢鱈に
力辯を入れて、一足飛に日銀の副支
配人、是清先生馬鹿々々しく牙を吹
く事になつて仕舞つた

▲次で日銀の建築係から山本内閣の政相
之が南瓜ならこんな言に當ると夜なく化て
出る、其後一夜作りやうも政友會に買
はれて政務調査會長、總ては元田、大岡、奥
田に代つて建替候補者ヲナ事になるだらう
高橋是清君も、今が得意極頂と申す可きだ
▲流石政黨内閣の大藏大臣、少々有
能で無いにしても、姐妃のお百に累
つた海坊主とは聊か人格が違ふやう
だ、少年時代からあらゆる辛酸を嘗
め盡した次に、人間がヌーッとして
居る癖に却々如才の無い所がある、
先輩へ取入る當當と來ては天稟の妙
手、怪し氣な蓄鬚を奉つて井上老
侯の御機嫌を取結んだり、トボケた
氣縮を飛ばして、山本權兵衛伯の脈
を乗り出さしたり、七擒八縱の手際
誠に鮮かなものだ
▲快活なのは天性、逆境のドン底に
落ちて「悪い事もあれば善い事も
あるさ」と、頗る達観したものだ、
尤も少々神童が過鈍な故かも知れな
い、一寸見は頗る傲慢不遜だが、人
間は案外氣量な正直者「アキラメの
よい無邪氣な坊ちゃん」として政友
會あたりの受も隔更ぢや無いやうだ

▲日露戦争で百萬の富を積んだ時、養母さんの眼の前に百萬圓程紙幣を積んで慰めたこと云ふ話があつた、是清式に馬鹿氣た所が振つて居るぢや無いが、後赤坂の名妓萬龍などに鼻毛を提供したが、色師の口は柄に無いかして到頭恒川果とやら云ふ大學生に背負投を喰はされて仕舞つた、或別帳者が此由是清許に電話で注進すると、出て来たのは女の聲「ソツソツな事は存じません」とブリー／＼仕舞ら電話を切つたこと云ふ、母こそ令夫人の逆鱗だ「海坊主の油は何になら」なんて巫山戯たものだ、▲大田としては少々三枚目染るが、人間は件の船式で却々變遷がある、アノ姑未園が近頃何と感じたか私財の大部分を投じて、政黨のお祭り騒に没頭する事になつた、そのうち云ふ、知才の無いのが取柄で政友會に於ける地位、今の所では先づ安岡、野田又面白い脱線振を拜見する機会も御座らうか

農學會報原稿用紙

明治四十四年一月二十六日
東北新文六〇三九号

故惠齋翁の遺風

門下生遺徳碑を建てる
故惠齋松田翁は隠れたる篤行の學者なり、世々越前郡南郡村大字二郷に住す、學を顧學阪元を同齡に受け彼の齋應竹堂小野寺風谷等と同門たり、性極めて謙和温厚節義を重じ克く産を治む會て浦谷邑主に援擡せられて南郡五ヶ村の宰となり又公共事業に盡瘁し賞を受くること多し翁の休養を開いて郷黨を教授するや常に實踐躬行を以て範とし一郷の子弟翕然として門に集り今尚ほ其の遺風傳はり郷黨に範たる門下生多し翁の歿するや門生等翁の徳を歎慕し木下勘三郎高橋道漢氏等首らなり、遺徳を樹つもの計ありしが木下氏の死に依りて果さず、高橋道漢氏を治應崎庄次郎氏等之れを遺徳とし、九年門生を力を致せて計劃を施行したる効果空しからず、昨年十一月を以て建碑工事竣功し本月四日を以て建碑式を同郡同日二郷慶半地なる碑場に於

て舉行したり、式場は委員數員と神官朝來の帶備に依りて供感なく裝飾せらる、式に列したるは理首館主令夫人戸田遠田部長鈴木郡長安住縣會議員長谷、狩野、大松澤氏等の古老浦谷南郷の有力家小學校職員生徒遺族與門下生等四百餘名、式は午後十一時神官力山廣穂氏の祝の行事に始まり祭主小山出憲一郎氏の祭詞ありて門下生總代高橋道漢氏は左の式辭を朗讀し併せて會計の報告を爲すも
式辭
故惠齋松田先生遺徳碑成り本日吉日辰を卜し建碑式祭を舉行するに際し招待各位の光臨を辱ふし欣喜何ぞ之れに堪えむ
惟るに先生の行蹟は大槻文庫博士の文明備蓋し世の大家名門と稱すともや多し世に衰ふ況んや三世に或る無からむは皆先生温徳の然らしむる處以生等誠に敬慕の至りに堪へ
回顧すれば先生天壽を以て世を以て既に十年當時友人木下勘三郎首ら建碑先生の爲めに一碑を樹て師徳を永遠に顕彰し聊か思に報いんとを以て請ふ再三遂に嘉納せらる専ら辦任局旋す幾くもなく不幸二翌の歳ふ所となり亦前後相繼と世を去るもの少なしとせざる然共其遺志を紹繼し進んで多大の翼を寄與せられたる厚志を感附し併せて泉下の靈亦喜んで充

生に見らる、とを感思せんば非ず
茲に建碑を陳口讀て式辭となす
明治四十四年一月四日
舊門人總代 高橋 道漢
續いて翁の嗣子松田常治氏の祭文大松澤壽、練牛校長佐々木孝治、二郷校長安部盛、二郷青年會總代木村任藏諸氏の痛切なる祝文朗讀浦谷小學校校長富塚雄治、元浦谷校長中野清蔵、阪元敬一郎氏等の祝歌各二首宛の朗讀、大槻文庫博士其他より寄せられたる書簡の披覽ありたる後嗣子常治氏玉串を獻じ親族並に一般参列者の禮拜ありて正午式全く終り式後松田常治宅に於て祝宴會を開く來會者九十餘名常治氏の挨拶戸田部長の謝辭あり宴酣なるに及んで種々雜多の餘興を演じ主客十分の歡を盡して散會したるは七時過ぎなりし、尙ほ碑は惠齋松田先生の遺徳と名け大槻博士の撰文伊達邦宗君の家額にして長孫丹司氏(小牛田農林教諭)の書せる處なり

(二十行 二十三字詰)

大正七年六月六日 萬朝報 八九七一号 山下竜三郎

風教を害する者

▲風教に關する問題たるのみならず、實に又國民をして、成金萬能の思想を懐かしむる所以にして、遂に國家の元氣、國民の士氣に關する所大なれば也。殊に平生青年の精神を損傷する者の行爲として、最も其の弊害を賣むるに足れりとす。

▲彼の國外に在つて自家の使命を全うする能はず、富に國民に對して、謙遜すべき態度に在るを思はず、靡つて成金聖と稱を演ずる者亦其の罪輕からず、記者以て如何と爲す。

▲萬朝報記者足下、近頃風教を害し、人心を毒する事件あり、而も世間多く之れを咎めず、自ら其の害毒を流布する者亦殆ど之れを覺らざるの風あるに至つては、眞に咄咄怪事と謂はざるべからず。

▲予は嘗て貴紙に依りて、山下竜三郎なる者を知れり、彼れ所謂成金の勢威を張りて、到處其の俗惡惡味を發揮し、最近田中參謀次長、内田駐露大使其他を誘つて多摩川に遊び、數多の紅裙杯舞の門を幹度し、主客▲斯くの如きは、實に帝國軍人乃至官吏の

▲龍三郎なる者の首領は、多く之れを論ずるに足らず、唯だ現に參謀次長の職に在りて、殊に全國青年の元氣を鼓吹するに努め、田中參謀次長が、軍國主義の精神を、或意味に於ては其精神と爲り、而して又現に露國邊境に據り、脅かされて、勿體無れ歸へれる内田駐露大使が、同じく成金の誘ひと爲りて自ら顯微鏡を以て、十分世間の注意を促がす

山下竜三郎

大正七年二月三日 萬朝報 八九八六号

取めて西に去るは、大將にも似合はぬ不徳不義、成金の金を得て、學士院を建て、買ひ成金の氣前可を、諸學者は、皆太以下、俸取、學の入場料を上る世の中に、購置、富のみは、依然舊阿摩食で行くが、感心

農學會報原稿用紙

(二十行 二十三字詰)

大正七年六月十九日 東京 朝日新聞

國語調査委員會編纂

口語法

▲本著 現代の口語に於ける法則を叙述せられたる口語の法則中の骨子の詳細なる事實は之を「口語法別記」(近に遺く)主査委員大槻文彦博士の立案起草に成り、起草委員會及び本委員會の審議を経て、上田(西)芳賀藤岡博士等特別委員により、本書の價値は敢て言を贅するに整理せられたる。本書の價値は敢て言を贅するに整理せられたる。

東京市日本橋區新右衛門町 振替東京 三三九六
株式會社 國定教科書共同販賣所

大阪府西區阿波座 振替東京 一五〇三五
株式會社 國定教科書共同販賣所

發行所 同大阪出張所

文部省蔵版
三和製全一册
定價金四拾五錢
郵税金八錢

